

受領書

平成30年 5月 2日
特許庁長官

識別番号 100110559
氏名(名称) 友野 英三 様

以下の書類を受領しました。

項番	書類名	整理番号	受付番号	提出日	出願番号通知(事件の表示)	アクセスコード
1	特許願	DCT18025	51800924356	平30. 5. 2	特願2018- 88871	320F
2	特許願	DCT18026	51800924357	平30. 5. 2	特願2018- 88872	321A

以 上



【書類名】 特許願
【整理番号】 DCT18026
【提出日】 平成30年 5月 2日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 G06F 21/56
【発明者】
【住所又は居所】 神奈川県鎌倉市山ノ内 5 9 1 番地
【氏名】 根来 文生
【特許出願人】
【識別番号】 598037422
【氏名又は名称】 根来 文生
【代理人】
【識別番号】 100110559
【弁理士】
【氏名又は名称】 友野 英三
【電話番号】 0422-27-7774
【手数料の表示】
【予納台帳番号】 164782
【納付金額】 14,000円
【提出物件の目録】
【物件名】 明細書 1
【物件名】 特許請求の範囲 1
【物件名】 要約書 1
【物件名】 図面 1

【書類名】明細書

【発明の名称】添付ファイルデータ診断装置及びプログラム

【技術分野】

【0001】

本発明は、添付ファイルデータ診断装置に係り、特にたとえば、添付データの開封者が、開封問題が発症する前に対処することを可能とする方法、装置、及びプログラムに関する。

【背景技術】

【0002】

発明者による以下の方法

- (1) 無限象問題の解法論
- (2) データ解析の普遍的な方法

【0003】

本発明の原理は本発明者による形而上学的存在論の模型である、下記非特許文献1に掲載されている。

【0004】

- (1) シナリオ関数

【0005】

シナリオ関数とはプログラム問題を解法することを可能にするプログラムのソースの定義法である。

【0006】

プログラム問題とは以下の課題である。

- (1) バグレス化
- (2) テストレス
- (3) デッドロックからの解法
- (4) ウイルスの無力化

【0007】

シナリオ関数はウイルスを通常データとして受容する。そして、シナリオ関数が行う本来のデータ処理の過程で、そのウイルスを自律的に無力化する。即ち、溶解させてしまうのである。

【先行技術文献】

【非特許文献】

【0008】

【非特許文献1】根来文生著、「Lyeの仮説的世界」、ハミド・藤田、ポウル・ジョナネッセン編「IOS第84巻 ソフトウェア方法論、ツール及び技術における新潮流」p. 3—22、アイオーエス出版、2002年、ISBN 1 58603 3887

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0009】

本願は、利用者に電子的に送付されてくるメールに添付されている「添付データ」を開封することにより、添付データに組み込まれているウイルスプログラムを起動させてしまう問題から、利用者を守るための方法である。図1参照。

【0010】

添付データの開封問題に関する対応策が講じられないシステム提供側の事情とならば、開封機能を使用しない様にする利用者側の愚策の関係は、例えば、ウイルス問題もそうであるが解法できる問題であるにもかかわらず、問題が露呈される都度、問題の論点を過大化させて解法を曖昧にさせる第三者的役割を果たす専門家と称する勢力が登場して、利用者側に安易な愚策を選ばせる様に誘導している。これは1970年代からこの分野に見られる人種である。彼らは論文や本の著者になり、専門家と称して、都合の良い仲間内に根

を下ろしている。彼らはけっして問題を直視しないし、その解法に貢献するわけではない。この様な専門家は大学にも研究所にもソフト会社にも、そして、大手企業の利用者のなかにもいる。この様な異常さが存在する故に、この種の問題は急ぎ解法してしまわなければならない。この様な風潮は電子時代であるだけに短期間で広く人類に及ぶ。これは、全人類参画型の、そして、誰も制御ができない新ファシズム誕生の前夜の様相に似ている。本願の狙いにはヒットラと戦う当時のチャーチル首相がいった言葉を真似れば、この状況を改善する為には、本発明はプログラムが責任を果たせる様にするためには、この様な専門家が大学とも、研究所とも、ソフト会社とも、そして、大手企業の利用者とも戦い論破しなければならないのである。

【0011】

本発明者はこの問題がIT分野では大きな問題だという事を近頃教わったのであるが、話を聞いてみると、シナリオ関数では既に解放されているウイルス問題と同様の課題にもならない問題なのだが、他方、確かに、この問題は発想を転換しなければ解法できない問題である。故に、現状の専門家レベルでは解法できないことは確かなのだが、本発明はこの問題を現状の網目システムに於ける基本問題、即ち、無限象問題として捉え、その解法論を求めることを本願の課題とした次第である。

【課題を解決するための手段】

【0012】

<無限象問題の解法>

図1参照。

添付データが悪事を働くとすればそれはそこに内在するプログラムである。故に、本発明では添付データにプログラムが内在しているか否やが、本発明に因る方法で判定される。即ち、本発明とはこの判定法の事である。添付データの型は今後のことも想起すると多種多様である。故に、本発明はこの問題は無限象問題として捉える。即ち、判定問題をこの添付データに限定して解くのではなく、全添付データに対して有効な方法で判定される。即ち、本発明では添付データを本発明内に取り込むところまでは、添付データの個別対応が可能な方法で対応するが、プログラムが介在するか否やの判定法は添付データの型を超越して行われる。付言すれば、この仕組が無限象問題を解法する論理の核である。これまでのひとの論理では部分的な解法論は成立すると合意し、全体の解法論は不定となるのが特徴である。

【0013】

本方法論では添付データの型の種別数問題を超越させる為添付データから予約語情報を統一的に捉える。図3参照。そして、図2と図3の情報からプログラム機能の判定を可能にする情報の図4が、概略的だが普遍性が成立するアルゴリズム図Cにより求められている。

【発明の効果】

【0014】

開封される添付データにより生じる問題が本発明により回避される。本発明は添付データが利用者により開封されると次の処理ステージに映る前に添付データに内在する可能的存在であるプログラムを取り出し、それを解析して、送られてきたプログラムの内容を利用者に告げる。利用者はその内容により、処理の継続が可能か、否かを判定し、可能であると判断すればその添付データを受容し、そうでなければ拒否することが出来る。

【図面の簡単な説明】

【0015】

【図1】本発明の課題を解決するための方式図に係り、添付データのセキュリティ解析の方式を示した図である。

【図2】本発明の一実施形態に係り、専用プログラムAで添付データから取り出される添付データに可能的に内在するプログラムに属す情報添付データに内在するプログラムの予約語列を示す図である。

【図3】図2の予約語列を専用プログラムBで8種の単元文に、概略的且つ普遍的に

置き換えられて成立する情報を示した図である。

【図4】図3から専用プログラムCを用いて、編集される添付データのプログラムの機能を示した図である。

【図5】図4から専用プログラムDを用いて、編集される添付データの開封者への警告文を示した図である。

【図6】図4のオリジナルプログラムを示した図である。

【図7】本発明の一実施形態に係る単元分主語系譜図である。

【0016】

単元文とは以下の8種の文種を指す。即ち、

- (1) 領域定義文、(2) 計算文、(3) 翻訳文、(4) 条件文、
- (5) 制御文、(6) 外部呼び出し文、(7) 開始文、(8) 終了文

【0017】

前項でいう概略的とは図2のプログラムの予約語を前項の8種の単元文で対応付けて置き換える考え方のことである。そして、普遍的とは図2のプログラムの本質は8種の単元文で置き換えられるとする考え方のことである。

【0018】

図2、図3の補記

本願の添付データのプログラムの記述言語は事例としてVBAで示す。故に、図2はVBAの予約語列である。故に、図3はVBAの予約語と8種の単元文の対応関係が定義されることになる。プログラム記述言語は添付データの型により、異なるのが現下の通例であるので、プログラム記述言語が代われば、図2、図3は改めて定義しなければならない。図2、図3はこの課題に備えて如何なるプログラム記述言語にも対応することが出来る定義の仕方を関係者に伝える作業仕様を兼ねている。

【0019】

図3の補記

VBAには予約語とみなされる変数名がある。たとえば、AutoExecは変数名として定義されているが本質は単元文の開始文に該当する予約語である。他のプログラム記述言語の図3を定義する場合、このような論考は不可欠である。

【0020】

＜プログラムA, B, C, Dに関する留意事項＞

4種のプログラムの内A, Bは添付データの型に依存して決められるが、C, Dは単元文の効果で型に依存せずに決めることが出来る。これは課題を解法する上で、重要なポイントである。4種のプログラム全てが型に依存しなければ決められないのでは課題を解法しているとは言えないからである。プログラムA, Bは添付データの型の構造を知る関係者により作成される。プログラムBはプログラムAの部分である。

【0021】

＜プログラムC＞

プログラムCは単元文順序列(図3)から添付データのプログラム機能(図4)を導出する専用プログラムである。図1参照。

【0022】

＜プログラムD＞

プログラムDは図4から図5(警告文)を編集する専用のプログラムである。図1参照。

【0023】

＜添付データのプログラムの予約語と8種の単元文の対応関係＞

添付データのプログラムの予約語と8種の単元文の対応関係図3は添付データのプログラムの記述言語が決まれば決まる。

【0024】

＜単元文と機能の関係＞

単元文と機能の関係は図2のソース例を用いて示される。図1参照。

【0025】

＜單元文と警告文の関係＞

單元文と警告文の関係は図2ソース例を用いて示される。図1参照。

【発明を実施するための形態】

【0026】

本発明はメイラー支援機能として位置づけられる。本発明をどの様に活用するかは、例えば、自動拒否、警告文を観察してから判断を決めるなどのことは利用者がメイラーとの間で決めることとする。

【実施例】

【0027】

本発明の原理は本発明者による形而上学的模型である。そして、この原理は以下の仕事で応用されている。

(1) 自動車用ディーゼル・エンジン制御プログラムの誤り箇所の探索システム。
約12年前、初版完成後、当時は発明者の指導がなければできない問題を大学などの研究者を動員すれば出来るものと勘違いし、次の版からその方針を進めたが失敗している。

(2) 6社の言語変換に適用された。

(3) 次世代構造のプログラム構造、シナリオ関数に転用されている。

(4) 最近ではシナリオ関数の自動生成ツール（平成28年度革新的ものづくり開発支援補助金、経産省）に使用されている。

【産業上の利用可能性】

【0028】

本発明は今後更に問題化される筈の発想を変えない限り、決して解決されることのない従来プログラムに潜む無限象問題の解法例にほかならない。無頓着に作成されているプログラムが産業製品として用いられているわけだから、問題が発症しないわけがない。プログラムの産業上の利用可能性に於いて、議論されるべき論点は、利便性の前に、その責任を負える品質を担保できる方法でプログラムが作られているか否やということが重要である。

【書類名】 特許請求の範囲

【請求項 1】

プログラムの記述言語の予約語列が定義される第 1 の手段と、
与えられる添付データについて、前記第 1 の手段で定義された前記予約語列に照らしてプログラム機能を導出して全ての型の添付データに可能的に内在するプログラムの予約語を普遍的な 8 種の単元文で捉え直す第 2 の手段と
を具備することを特徴とする添付ファイルデータ診断装置。

【請求項 2】

前記第 2 の手段による前記導出の結果による必要に応じて警告文を表出する第 3 の手段をさらに具備することを特徴とする請求項 1 記載の添付ファイルデータ診断装置。

【請求項 3】

請求項 1 記載の前記単元文列から前記添付データに内在する前記プログラムの機能を概略的且つ普遍的に捉える方法。

【請求項 4】

請求項 3 記載の前記添付データの前記プログラムの機能から開封者に伝える警告文を編集する方法。

【請求項 5】

請求項 4 記載の前記警告文により、前記添付データの開封者に該添付データの前記プログラムが実行される前に実行の可否を開封者に判断させる方法。

【請求項 6】

コンピュータに、
プログラムの記述言語の予約語列が定義される第 1 の手段と、
与えられる添付データについて、前記第 1 の手段で定義された前記予約語列に照らしてプログラム機能を導出して全ての型の添付データに可能的に内在するプログラムの予約語を普遍的な 8 種の単元文で捉え直す第 2 の手段と
として機能させることを特徴とする添付ファイルデータ診断プログラム。

【請求項 7】

コンピュータを、さらに、
前記第 2 の手段による前記導出の結果による必要に応じて警告文を表出する第 3 の手段として機能させることを特徴とする請求項 6 記載の添付ファイルデータ診断プログラム

。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 網目システムに於ける無限象問題を解法すること。

【解決手段】 本発明は、プログラムの記述言語の予約語列が定義される第1の手段と、与えられる添付データについて、前記第1の手段で定義された前記予約語列に照らしてプログラム機能を導出して全ての型の添付データに可能的に内在するプログラムの予約語を普遍的な8種の単元文で捉え直す第2の手段とを具備する。

【選択図】 図1

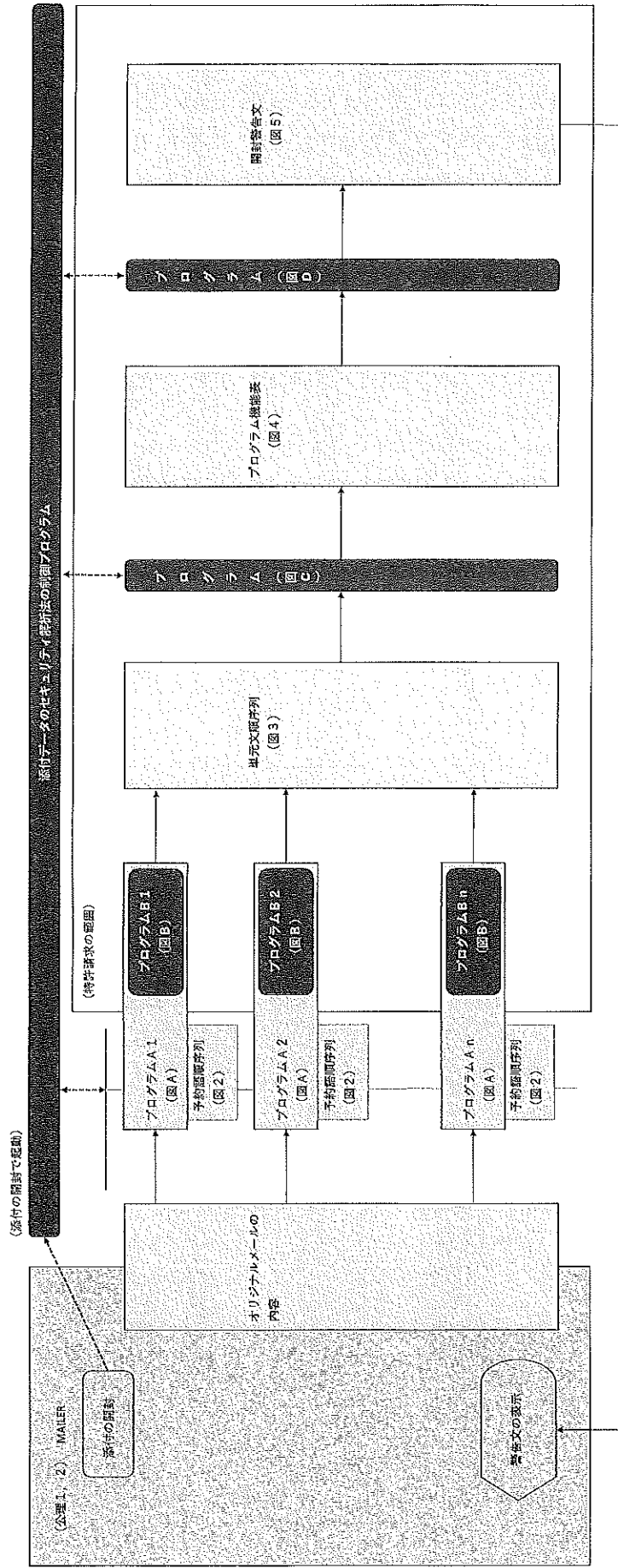
【書類名】 図面

【図 1】

図 1：添付データのセキュリティ解法方式

1. 本システムの公理

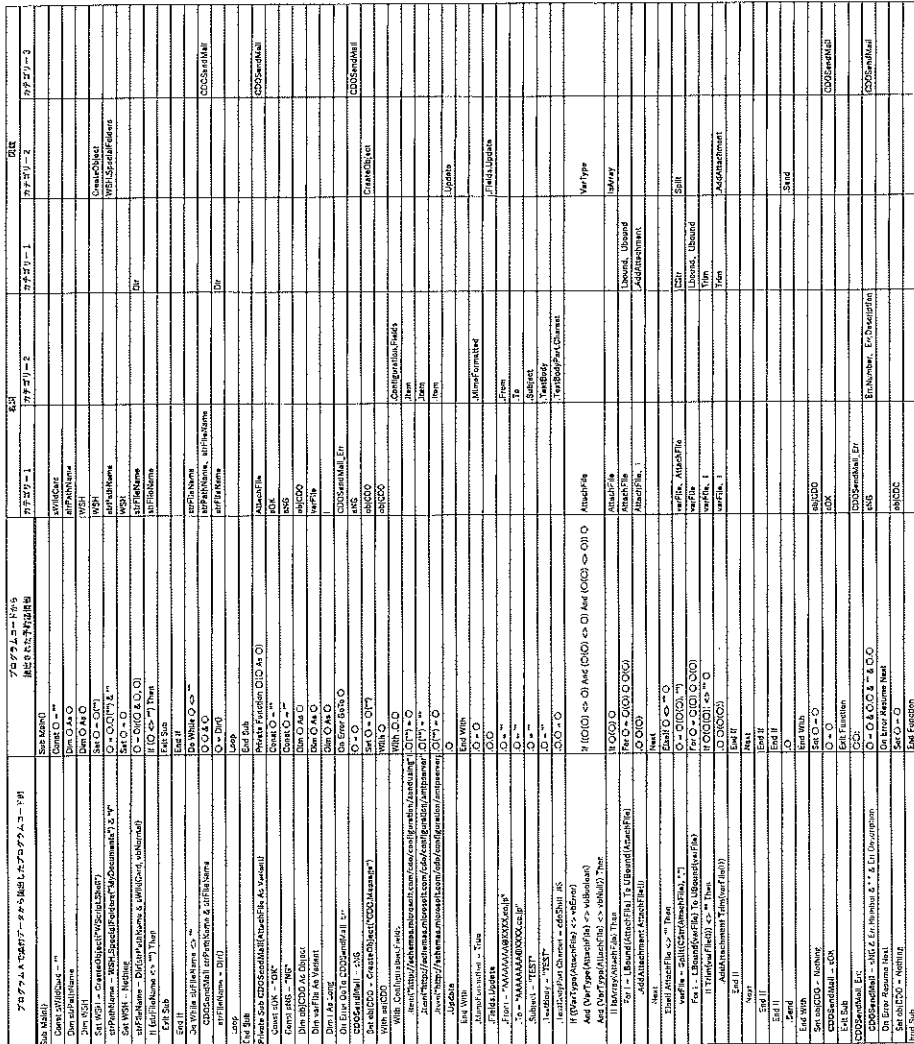
- 公理 1：「添付」の態列は無関係問題である。
- 公理 2：「添付」の基出、復号化、圧縮解法を現実対応化する。
- 公理 3：「添付」の内容を共通化する。



プログラム A は抽出プログラムである。
 添付データの型に応じた解法 (復号、圧縮解法) を行う。
 未来に登場するデータにおいても同様に抽出を行う。
 また、プログラム B を使い、添付データの型に応じた子列態列から
 添付データの単元文順序列を生成する。

【図2】

図2: 実行チャートに示すプログラムの実行フロー



プログラムの実行フローは、実行チャートに示す通りである。各ステップは、実行チャートに示すように、特定のコードとコメントによって構成されている。

プログラムの実行フローは、実行チャートに示す通りである。各ステップは、実行チャートに示すように、特定のコードとコメントによって構成されている。

【図3】

表3: 変数宣言表

0: 宣言あり, 1: 宣言なし

Table with columns: 変数名, 宣言あり, 宣言なし, ... and rows for variables like int, float, char, etc.

【図4】

【図5】

図5：開封警告文

機能を求めるために作成された単元文主語系譜から核主語を求める。
 3段階順位の核主語を用いて機能を判定する。

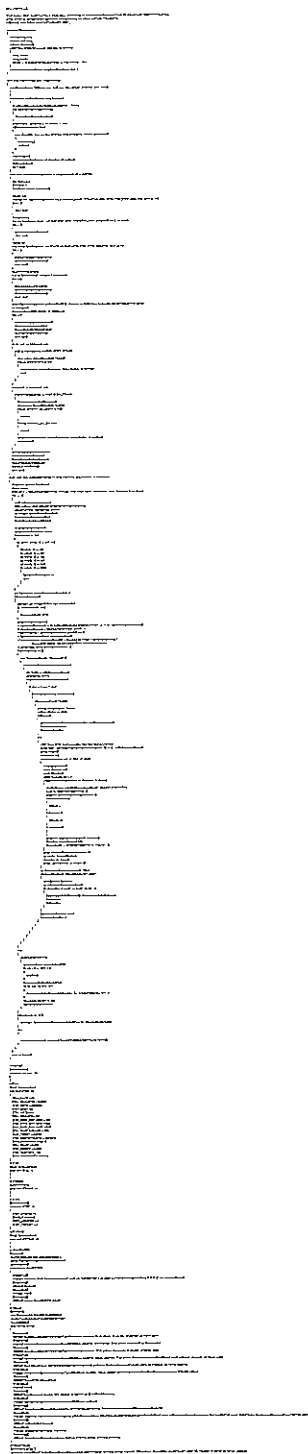
今回の例(図B)では以下が核主語である。

- L(条件文,40) 13矢線
- L(Call文,25) 9矢線
- L(条件文,45) 7矢線

調査対象は機能を内在するCall文を優先する。
 その対象となるCall文の主語系譜上の下位にあるCall文をすべて上げる。
 下位にCall文がない場合は次の核主語を対象とする。

これらのCall文の内容を警告文とする。

【図6】



【図7】

本発明の構成

